平成18年12月10日発行
発行：学校法人皇學館
編集：法人本部総務課
TEL0596・22・6308
E-mail : soumu@kogakkan-u.ac.jp

皇學館学園報 第10号

■伊勢学舎
[法人本部・大学院・専攻科・文学部]
〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町1704番地
TEL0596・22・0201㈹　FAX0596・27・1704
■名張学舎
[大学院・社会福祉学部]
〒518-0498 三重県名張市春日丘7番町1番地
TEL0595・61・3351㈹　FAX0595・61・3350
●インターネットホームページ
http://www.kogakkan-u.ac.jp

創立百三十周年・再興五十周年記念事業

新・祭式教室が竣功

神道精神の拠点が完成

さわやかな秋晴れに恵まれた九月二十四日、新・祭式教室の竣功祭が執り行われた。創立百三十周年・再興五十周年記念の関連事業として早い完成が待たれていたが、着工から七カ月を経て無事に竣功。この日は学校関係者、工事関係者をはじめ神社界からも多数のご参列をいただき、総勢約百名が出席する中で盛大かつ厳粛に式典は斎行された。今後、祭式教室は皇學館大学における祭式および行事作法教育の重要な拠点としての役割を担うことになる。

昭和46年に「神宮絵画館」が神宮のご好意により現在の地に移築され、本学の剣道場として使用してきた歴史を持つ。今回の工事で大幅に増改築、耐震補強を施し、他に恥じない規模と設備をもった祭式教室として生まれ変わった。

優れた神職を輩出してきた祭式教室

神道を教学の根幹とする皇學館大学において、祭式教室の歴史は古い。昭和三十七年に再興された本学では、翌三十八年の男子学生寮「精華寮」完成とともに三階大広間に神殿を併設し、ここで祭式関係の授業を行ってきた。しかし、大学の発展にともない学生数も増加。神殿大広間は手狭になり、祭式を執り行うのにも支障をきたすようになった。そこで、昭和四十七年、創立九十周年・再興十周年の折、神宮皇學館本館（下記コラム参照）を記念館として整備し保存するのを機に内部に神殿を設け、新たな祭式教室としたのである。

この祭式教室からは多くの優れた神職が全国へ巣立っていった。ところが、平成十六年に記念館が耐震強度の点で極めて危険であることが判明。惜しまれつつも祭式教室として活用された三十三年にわたる歴史に終止符を打ち、早急に代わりの施設を整備する必要性に迫られていた。

建物の前身は神宮の歴史絵画館

ここに、最適の施設として白羽の矢が立ったのが、剣道場として使われていた建物だ。現在の地に移築されるまでは宇治橋前にあった神宮の歴史絵画館という由緒を持ち、神宮古材の丸柱を使用したすばらしい建築である。神宮と本学との関係を踏まえても、この御縁深い建物で祭式を習うことは最も理想的といえよう。

折も折、本学では新総合体育館の建設を進めており、剣道場を含む武道関係をすべて収容する予定であった。竣功も新年度に間に合う。剣道場を増改築・耐震補強して祭式教室に替えるという意見に異論はなかった。

祭式教室　平面図

■総面積
674.24㎡
■増築部分
376.78㎡

祭式教室	●神殿 …… 2	教員控室	…… 1
	●祭具庫 … 2	男子トイレ	…… 1
手水場	…… 1	女子トイレ	…… 1
男子更衣室	…… 3	湯茶室	…… 1
女子更衣室	…… 1	祭具庫	…… 1

「浦安の舞」を静かに見守る参列者たち。浦安とは心やすらかという意味で、多くの祭典で奉納されている神前神楽のひとつ。

日本一の祭式教室が誕生

着工からおよそ七カ月。大幅な増改築・耐震補強が施され完成した祭式教室は、本格的な神殿を備えた他に類を見ない建物として生まれ変わった。手水場や祭具庫、更衣室などの諸設備も充実。神明妻入口の玄関も壮厳な佇まいで、まさに神社祭式や行事作法を学ぶにふさわしい建物である。名実ともに日本一の祭式教室といえ、神職養成の大任を担っている本学にとって歴史に残る快挙だ。

看板をかける関係者の方々（右から小串神社本庁常務理事、田中神社本庁副総長、伴学長、上杉理事長、矢田部神社本庁総長）。

厳かに執り行われた竣功祭

清々しい白木の香漂う中で行われた竣功祭では、斎主が無事に工事が完遂したことへの感謝を奉告。満座の参列者は身じろぎ一つせず、じっと耳を傾けていた。

続いて、雅楽部の学生が奏楽を務め「浦安の舞」を奉納。最後に、挨拶に立った上杉千郷理事長は完成の喜びとともに、神殿の設計監理を引き受けてくださった前明治神宮技師・井上秋夫氏をはじめ関係各位のご厚誼に謝辞を述べた。そして、「学生には祭式教室で本学の建学の精神を体し、卒業後各神社に於いてそれを発揮して貰いたい」と抱負を語り、締めくくった。

神宮皇學館時代の遺構

記念館が国の有形文化財に

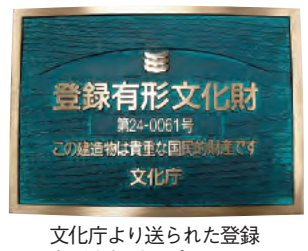
装飾性を抑えた堅実な意匠や構造から、大正期における近代和風建築の動向が垣間見える。

神宮皇學館時代の歴史を今に伝える記念館が、八月、国の登録有形文化財に認定された。この記念館は神宮皇學館が大正七年に宇治館町から現在の倉田山に学舎を移したことに伴い翌八年に本館として建築されたものである。

建物を見てみると、玄関車寄は唐破風屋根を載せた風格ある佇まい。内部には事務室や貴賓室、館長室などが設けられている。とくに、館長室は木製のカーテンレールや床の間が当時のまま保存されており、大正期における近代和風建築の水準や様式をよく示しているといえよう。

現在は耐震上の問題が指摘され使用されていないが、平成十九年二月から同年十二月にかけて耐震改修工事に取り掛かる予定だ。無事終了した暁には会議や懇談、茶会などが行える施設として大いに活用されることが期待される。

大正期の建築の特色を伝えるのみならず、当時の教職員や学生にとって忘れがたい母校のシンボル的存在であった記念館。一日も早い完成を待ちたい。



文化庁より送られた登録有形文化財のプレート。

皇學館ならではの魅力がいっぱい！

熱気に包まれた大学祭

秋といえば、学園祭。本学でも十月二十八日・二十九日に名張学舎で「皇名祭」が、十一月三日から五日にかけては伊勢学舎で「倉陵祭」が開催された。本学の大学祭は全日程の最初に大学祭の無事を祈願する祭典を斎行すること、そして、学生が主体的に運営するのが特長だ。さまざまなグループが日頃の活動を発表したり、新しいことにチャレンジしたりと若いエネルギーを表現する場となっている。今回はその取り組みを中心に、個性あふれる学生たちの姿を追った。

子どもにもわかる「福祉」を

皇名祭・名張学舎

アイマスクをした男の子が手をひかれながら点字ブロックの上をこわごわと歩いている。福祉部署の目玉企画「迷路で知ろう～バリアの世界～」での一コマだ。全体を取り仕切るのは社会福祉学部二年生の前川りささん(19)。将来、養護関係に進みたいと考えている前川さんは自分にとってもプラスになる良い経験ができるのではないかと、リーダー役をかって出たのだという。

スタッフたちが付きっ切りで指導。

部署のメンバーと話し合ったのは〝「福祉」をわかりやすく伝えたい〟ということ。そうして誕生したのがこの企画だ。二人一組になり、一人が目隠しをして進む。途中、点字ブロックがあったり凸凹の道を車椅子で通ったりして、ゲーム感覚で障害者の世界を体験できるようになっている。

「最初は不謹慎に思われるんじゃないかと心配しました」と打ち明ける前川さん。「でも、『車椅子に乗ってみたい』と面白半分に参加した子が、わずかな段差でも乗り越えることが難しいことを知って真剣な顔になったりする。体験したから、その重要性を知ってもらえた。遊びの要素を取り入れたからこそ、子どもや福祉に関心が薄い人も気軽に参加できる雰囲気になったと思います」。

点字ブロックの上を不安そうに歩く体験者。目の不自由な人の心細さを、身をもって感じたようだ。

準備に半年、試行錯誤の迷路づくり

準備は半年前から。福祉を学んでいるとはいえ、やはりプロではない。まちがっても参加者がケガをする事態にならないよう、念には念をいれて作業を行ってきた。難しかったのは段差のさじ加減。高すぎても低すぎてもコースとして成立しないため、メンバーが乗っては調整し、調整しては乗って、ようやく完成にこぎつけた。

参加者からは「怖かった」「こんなに力がいるとは」など不自由さを疑似体験した感想が聞かれる一方で「点字ブロックの上に自転車を置かないよう気をつける」「町で目の不自由な人を見かけたら、手伝ってあげたい」という声も。前川さんはこの企画をきっかけに少しでも障害を理解し、障害を持つ人の気持ちに近づいてくれたら、と笑顔で語る。

メンバーと(前川さんは左から3人目)。

十一の部署が日頃の成果を発揮

第九回皇名祭ではテーマに「夢芽☆舞宙」を掲げた。〝小さな芽のような夢も、いつか宙を舞うほど大きな夢になる。だから諦めず進んでいこう！〟との思いからだ。その願いに違わず、福祉部署をはじめ文字通り元気にチャリティーバザーを成功させた元チャリ部署、芥川賞受賞作家・伊藤たかみさんを招き好評を博した講演部など、十一の部署が大いにキャンパスを盛り上げた。

学生たちの個性豊かなアイデアやイベントに、毎年皇名祭を楽しみにしているという家族連れは「にぎやかで子どもたちが喜ぶ」、今年で三回目という地元の主婦は「若いパワーって頼もしいですね」と感心しきり。実りある二日間となったようだ。

毎年大人気のチャリティーバザー。

新企画の〝想造〟がきらり

倉陵祭・伊勢学舎

十一月三日から五日にかけ執り行われた倉陵祭は、快晴が続き天候に恵まれた三日間となった。

初日に行われたのは、幕開けにふさわしい恒例の樽神輿。一年生から四年生まで、夜遅くまで準備した〝傑作〟が御幸道路を巡幸した。夜には新企画のホールトラディションで伊勢音頭を保存会の人達と学生が一緒に踊った。四日に開催された学生ライブでは校内オーディションを勝ち抜いた八組が熱唱。五日の目玉は多彩な技で一大旋風を巻き起こした元小結・舞の海秀平氏による講演会。身長が足りないため頭にシリコンを入れて新弟子検査に合格した話など、夢の実現に向かってひたむきに歩んできた姿に、学生も感じるものがあったようだ。後夜祭では、新企画の御薗町の手筒花火の披露があった。

テーマ〝想造〟に恥じることなく、さまざまなアイデアが光った今年の倉陵祭。来年はどんなパフォーマンスが見られるのか、楽しみだ。

みごとな手筒花火。

60人の踊り子が完全燃焼！

皇學館よさこい踊り in 伊勢おおまつり

新しい伝統の〝よさこい〟を続けたい

教育学科四年生の田中克幸さん(22)が「よさこいグループをまとめてみんか」と声を掛けられたのは、五月のことだった。

皇學館大学にはよさこいサークル「雅」がある。しかし、諸事情で恒例の伊勢おおまつりパレードに参加しないことが決まり、新たな担い手が必要とされたのである。

田中さんは迷った。雅に所属していることもあり、よさこい踊りが一朝一夕で身に付くものではないことは知っている。メンバーも一から募らなければならない。伊勢おおまつりが開かれるのは十月中旬だ。果たして、練習する時間がとれるだろうか――しかし、田中さんは引き受けることを決意する。皇學館のよさこい踊りは伊勢の新しい風物詩といっていいほど、毎年楽しみにしている人が多い。先輩方が築いた新しい伝統を、自分たちの代で終わらせるわけにはいかなかった。

リーダーを務めた田中さん。

キャッチフレーズは「楽しく踊ろう」

引き受けたものの、メンバー集めには苦労した。よさこい踊りの評判の良さを知ってか、興味はあっても「レベルが高いのでは」とし込みする人が多く、なかなか参加者が現われなかったのである。田中さんは「楽しく踊ることが大事。上手さを競うものじゃない」と懸命に説いて回った。やがて、田中さんの熱意に動かされてか、段々と人が集まるように。そして、最終的には六十人ものメンバーを抱えるまでになった。

感動で涙ぐむ観覧客も

皇學館のよさこい踊りは伊勢音頭や寮歌とソーラン節をコラボ。新しさの中にもどこか古風な調べが特長で、鳴子隊・扇子隊・旗隊の三部構成となっている。

伊勢おおまつり当日は、尼辻の交差点から伊勢市駅前までの約一キロをパレード。みな全身汗びっしょりになりながら、笑顔で踊り切った。

衣装変えあり、踊りあり。次々と繰り広げられる華麗なパフォーマンスに感動したのか、話題の踊りを一目見ようと集まった見物客の中には思わず涙ぐむ人も……。祭りに彩りを添えたよさこい踊り。皇學館の新しい伝統として、受け継がれていくに違いない。

沿道の人たちからの惜しみない拍手と歓声に包まれ、汗びっしょりになって踊るよさこいメンバー。

創立百三十周年・再興五十周年記念事業寄付者芳名⑨

創立百三十周年・再興五十周年記念事業募金につきまして、学内外の方々から変わらぬ励ましの声とともにその後も多くのご芳志をいただきました。みなさまのご理解とご好意に対して心より厚く御礼申し上げると同時に、ご協力いただいた方々の芳名を掲載させていただきます。事業活動の一層の充実をはかるべく、今後ともどうぞよろしくお願い致します。芳名掲載につきましては、十月三十一日までの到着分とさせていただきます。

創立130周年・再興50周年記念事業寄付金進捗状況

平成18年10月31日現在

区分	申込件数	申込金額(円)	納入金額(円)
宗教界	507	671,295,000	436,430,000
館友	559	66,826,000	53,376,000
篤志家	35	27,490,000	27,290,000
萼の会	1,285	46,065,000	46,065,000
企業	97	56,075,000	48,135,000
本法人関係	231	54,707,000	42,047,000
合計	2,714	922,458,000	653,343,000

宗教界

神社界

宮城県
五十万円　金華山黄金山神社様（石巻市鮎川浜金華山）

栃木県
二十万円　日光二荒山神社様（日光市山内）

埼玉県
十万円　玉敷神社様（北埼玉郡騎西町）
十万円　高麗神社様（日高市新堀）

千葉県
三十万円　櫻木神社様（野田市桜台）

岐阜県
四万円　飛騨天満宮様（高山市天満町）
二万円　岸剱神社様（郡上市八幡町）
二万円　荒城神社様（飛騨市高野）
二万円　三輪神社様（岐阜市芥見長山）
二万円　新羅神社様（多治見市御幸町）
二万円　村国神社様（各務原市蘇原新生町）
二万円　白山神社様（多治見市白山町）
二万円　武並神社様（恵那市武並町）

館友（個人）

岐阜県
二十万円　白山　智義様

愛知県
五万円　嬉野　通斎様

三重県
十万円　松井　秀宗様
六万円　中村　吉宏様

和歌山県
一万円　岩本　和子様

徳島県
六万円　三好　隆治様

萼の会（保護者の会）

博士前期課程 神道学専攻
五万円　曽我　啓市様

博士前期課程 国文学専攻
三万円　河合　重好様
三万円　柚木　正夫様

修士課程 社会福祉学専攻
三万円　本田　利峰様

神道学専攻
三万円　石川　博様
三万円　石本　邦昭様
三万円　櫻井　滋子様
三万円　髙木　保生様
三万円　藤村　紀子様

文学部神道学科
十五万円　厚見　恵様
六万円　鈴木　和幸様
六万円　野上　謙治様
三万円　青井　美彦様
三万円　足野　吉弘様
三万円　荒谷　利信様
三万円　池山　平照様
三万円　石川　正雅様
三万円　磯田　文男様
三万円　今井　悦夫様
三万円　上村美千代様
三万円　内田　嘉彰様
三万円　大西　正文様
三万円　大西　祥太様
三万円　岡本　宗道様
三万円　小野　雄一様
三万円　小野　日隆様
三万円　神守　実一様
三万円　河野　宗清様
三万円　菅野　覚明様
三万円　木村　直彦様
三万円　小林　司様
三万円　坂本　直明様
三万円　櫻井　利幸様
三万円　櫻井　令子様
三万円　佐古　充様
三万円　佐々木宗昭様
三万円　定村　政幸様
三万円　重村多津恵様
三万円　白鳥　茂男様
三万円　杉山　茂様
三万円　武田　俊博様
三万円　武政　年広様
三万円　舘　栄二様
三万円　建島　章生様
三万円　立悉　廷族様
三万円　田中　政行様
三万円　那須　隆盛様
三万円　野中　要佐様
三万円　野原　壽雄様
三万円　野水　整様
三万円　東川　寛司様

個人情報保護に関する法律の施行に伴い、ご芳名・金額等の掲載をご希望されない方々につきましては、別記とさせていただきました。
■館友／二名　■萼の会／百名

文学部国文学科
三万円　平岡　隆様
三万円　藤原　清次様
三万円　船原　千廣様
三万円　松林　操様
三万円　村岡一比古様
三万円　元橋　茂様
三万円　守田　義久様
三万円　簗瀬　睦様
三万円　横森　寿夫様
三万円　吉本　邦夫様
三万円　両川　浩子様
三万円　和辻　隆様
三万円　木村　忠正様
三万円　髙津　憲城様
三万円　古賀　寛治様
三万円　児玉　きよ様
三万円　下村　淳麿様
三万円　庄山　敏様
三万円　仙島　秀雄様
三万円　多湖　清隆様
三万円　田村　保様
三万円　千代　浩二様
三万円　西場　久人様
三万円　平子　一二様
三万円　松田　光世様
三万円　村田　仁様
三万円　山本　紀昭様
三万円　渡部　俊美様

文学部国史学科
六万円　大前　文夫様
六万円　佐野　栄治様
三万円　足立　良弘様
三万円　井口　三郎様
三万円　伊藤　正法様
三万円　大友　重幸様
三万円　岡本　彬様
三万円　粕谷　清明様
三万円　片岡　靖正様
三万円　河口　俊敏様
三万円　川出　芳義様
三万円　川村　春之様
三万円　小松美喜夫様
三万円　佐藤　正夫様
三万円　西浦　修様
三万円　錦戸　正大様
三万円　橋場　敏様
三万円　橋本　忠明様
三万円　福嶋　賢司様
三万円　藤浪　清仁様
三万円　前川　美明様
三万円　村上　信二様
三万円　本川　坂一様
三万円　森田　定様
三万円　森本　秀司様
三万円　山川　実様
三万円　吉田　逸郎様

文学部教育学科
六万円　佐久間　紀様
三万円　新井　秀啓様
三万円　新井　正人様
三万円　大仲　正博様
三万円　大西　昇様
三万円　加藤　眞弓様
三万円　坂根　英樹様
三万円　佐藤　恵一様
三万円　下井　清嗣様
三万円　杉谷　政樹様
三万円　鈴木彦四郎様
三万円　田中　義一様
三万円　辻内　晶様
三万円　出口　久雄様
三万円　野口　進様
三万円　林　恵祐様
三万円　林　清和様
三万円　平田　誠様
三万円　平田　昭夫様
三万円　水谷　信夫様
三万円　森　仁子様
三万円　余島　修身様

文学部コミュニケーション学科
三万円　伊藤　徹様
三万円　伊比　昌弘様
三万円　上野　芳樹様
三万円　浦野　功様
三万円　小谷　勝紀様
三万円　小西　和子様
三万円　妹山　滋様
三万円　高田　明裕様
三万円　谷岡　衛様
三万円　野浪　隆様
三万円　平石　和久様
三万円　山田　龍巳様
三万円　横山　武様

社会福祉学部社会福祉学科
三万円　池田　高志様
三万円　上野　洋様
三万円　臼井　隆様
三万円　大井　康生様
三万円　奥田　富雄様
三万円　嘉戸　英次様
三万円　加藤　正弘様
三万円　加藤　道夫様
三万円　小室　伸行様
三万円　米谷　篤宏様
三万円　桜井　隆司様
三万円　柴原　修二様
三万円　杉本　幸成様
三万円　鈴木　康夫様
三万円　高原　家直様
三万円　田中　晴久様
三万円　玉井　利明様
三万円　辻　喜久雄様
三万円　筒井　芳美様
三万円　中川　喜直様
三万円　中林　幸弥様
三万円　長屋　豊様
三万円　野口　孝様
三万円　野口　守茂様
三万円　萩原　武広様
三万円　濱田　要様
三万円　林　篤信様
三万円　藤原　英史様
三万円　堀川　芳毅様
三万円　前田　末広様
三万円　前田　弘明様
三万円　増田　幸則様
三万円　松下　徹様
三万円　松島仙治郎様
三万円　松林　千年様
三万円　宮本　三郎様
三万円　宮本　昌博様
三万円　向井　敬道様
三万円　森下　雄司様
三万円　山本　章弘様
三万円　湯浅　元史様
三万円　渡辺　智幸様

企業

三十万円　石川商工株式会社様

本法人関係

学校法人皇學館教職員
十万円　中西　正嗣様

本人確認にご協力ください！

平成19年１月４日から、本人確認手続に関する法令の改正により、金融機関において10万円を超える**現金**をお振込みされる場合には、**本人確認書類の提示**が必要となります。提示がない場合には、金融機関では10万円を超える現金によるお振込みができません。

10万円を超える寄付金を現金でお振込みの際には、振込用紙とともに来店される方の本人確認書類をご用意のうえ、金融機関の窓口をご利用ください。

本人確認書類	運転免許証、健康保険証、パスポート等公的証明書

法人の場合、登記簿謄本等の提示を求められる場合がありますので、詳しくはお振込みを依頼する金融機関にお問い合わせください。

皇學館大学 問い合わせ先
記念事業推進室 ☎0596-22-6313

神宮大麻暦頒布始祭にあわせ開催

恒例の神社関係者招待会◆鳥羽国際ホテル

平成十八年九月十七日(日)、鳥羽国際ホテルにおいて、毎年恒例の神社関係者招待会が開催された。この招待会は神宮の大麻暦頒布始祭にあわせて開催させていただいており、平素からのご支援ご指導に感謝の意を表するための交流会である。

当日は神社本庁役員及び関係者の方々や、神宮からは少宮司をはじめ関係者、さらには各都道府県神社庁長の方々など九十八名のご参加をいただき、本学からは理事長、学長以下学内関係者二十名が参加し開催された。

理事長から平素からの本学へのご支援に対する謝辞と特に現在進行している創立百三十周年、再興五十周年の記念事業について、神社界からの格別のご支援と多大のご協賛を頂いていることに深い感謝と御礼が述べられ、学園運営の現況が報告された。また、明日行われる本学の祭式教室の竣功についても報告があり竣功祭へのご参列に対して感謝の意を述べられた。学長からも同様の謝辞と大学運営の現況、特に地方の私立大学の現況を鑑み本学の更なる入学志願者確保の努力と、志願者のご推薦のお願いがあった。また、卒業生の就職状況について、今年度の就職活動も例年並に順調に進んでいることが報告された。ご来賓を代表して神社本庁統理　久邇邦昭様からご挨拶をいただいた後、懇親会に移り、神宮少宮司髙城治延様による乾杯のご発声につづいて、和やかな宴が催された。盛況のうちに八時の予定の時間となり神社本庁総長矢田部正巳様の音頭で万歳を三唱して終了した。

挨拶の後の懇親会では久しぶりの再会を喜ぶ声があちらこちらから聞こえ、終始和やかな雰囲気となった。

挨拶に立つ上杉理事長。

学園ニュース

神嘗祭神宮参拝で自校史を知る
「初年次教育」を開始

名張学舎

学生生活へのソフトランディング

社会福祉学部では今年度より新しい環境に慣れることで、学習や友達づくりなど次のステップへ早く移行できるよう「初年次教育」という独自のプログラムを開始している。

その一つが週に一度行っている指導教員ごとのプログラムで、教員一名に対して学生七名という密な割合でコミュニケーションを図ってきた。担当する教員は学校生活の悩みはもちろん、プライベートな相談にも親身になって応じる。叶俊文教授は、この取り組みの効果を高く評価。さらに、対話の大切さや自分の言葉で話す力も身に付くと話す。

秋学期からは自校史を学んでほしいと神嘗祭にあわせた神宮参拝がプログラムに取り入れられた。学生のなかには本学の伝統と歴史を知らない者も少なくない。しかし、建学の精神に基づいた人間形成をめざす本学において、学生には学部を問わず根幹となる教義を正しく伝えることは必要不可欠である。

十月十七日の神嘗祭当日は、一年次の学生や教員およそ二百六十名が神宮へと参拝に向かった。神域ではその荘厳な雰囲気に圧倒されたのか、日頃とはうってかわったように静かに歩く学生の姿も。その後のミーティングでは「歴史の重みを感じた」「自分の母校を誇りに思う」といった声が聞かれ、意義深い一日となったのは間違いないようだ。

（写真）林崎文庫前で説明を聞く学生たち。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
中　京	0	0	0	2	0	0	1	0	1	4
皇學館	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1

惜しくも初戦突破ならず
秋季東海大会
皇學館高校野球部

応援スタンドからの声を背に、試合に集中するナインたち。

十月二十八日に松阪球場で行われた第五十九回秋季東海大会で、皇學館高校野球部は岐阜・中京高校に一―四で敗れ、初戦突破はならなかった。

勝算はあった。二点を追う六回裏、本校の攻撃。三橋選手の三塁打をきっかけに一点をかえす。なおも一死一、二塁のチャンスに谷中選手が盗塁に成功し三塁へ。ここで一気に反撃開始と思われたが、一塁走者の小泉選手が痛恨の牽制タッチアウトをとられ好機を生かすことはかなわなかった。

「場数の違いが大きい」と岡部博英監督は振り返る。「みんなよくやってくれたし、投手の長谷川はいつもより制球が良かったほど。だが、経験数でいえば相手の方が上。ピンチでも乱れることなく、流れに乗るタイミングを見事に潰された」と悔しさをにじませた。キャプテンを務める小泉直輝君は「普段通りの野球ができなかった」と硬い表情。知らず知らずのうちに大きなプレッシャーを感じていたようだ。

だが、収穫も大きい。秋季大会への出場は本校初の快挙。岡部監督も「手ごたえは感じた。方向性は決して間違っていない」と自信を持つ。また、これらの実績をかわれ、県高野連が行う海外遠征の選抜チームにコーチとして岡部監督が、主将兼捕手に下村尚選手が選ばれた。チームは十二月二十四日から三十日まで台湾に滞在し、親善試合を行う。

着々と成果をあげつつある〝人間力で勝つ野球〟。一戦ごとに成長し、来夏に臨む。

第2回 お蔭参り

百二十七年ぶりに「櫛田の渡し」再現
「伊勢まで歩講」と「リレー講座」を終えて

岡田　登

昨年のお蔭参り三百年、第六十二回式年遷宮諸祭諸行事開始の年に続けて、本年度も伊勢まで歩講とリレー講座を、本学と「平成のお蔭参り事業実行委員会」（事務局、伊勢市観光政策課、県市町の行政と民間三十五団体の参加）と共催で開催した。後援は、三重県・亀山市・津市・松阪市・明和町・伊勢市各教育委員会、三重県神社庁・結城神社・神戸神社・皇學館館友会・萼の会・学友会で、千巻印刷（ポスター作成）に協賛いただいた。

約八十キロ、二泊三日の旅
●伊勢まで歩講●

今年は、亀山市関町西の追分から東海道関宿を通り、東の追分（内宮正殿棟持柱→宇治橋内の鳥居→東の追分鳥居）から伊勢別街道→伊勢街道（江戸橋から）を経て、外宮・内宮・大学までの約八十キロを、十月七～九日の二泊三日で歩いた。

参加者は、岡田を含めて全日十一名（一般七名・学生三名、内女性三名）、一日参加七日八名（内女性二名）・八日五名（内女性一名）・九日四名で、最高齢者七十九歳・六十代七名・五十代五名・四十代一名・二十代五名の構成であった。最高齢の堤八知彦さんは亀山市在住で、若い人に劣らぬ歩きで三日間を歩き通され、体力と年齢は関係のないことを示していただいた。

今年は、後述するように宿泊のお世話をいただいた結城神社（宮崎吉章宮司）と神戸神社（丸山茂師宮司）でもリレー講座を開催し、神戸神社の講座をお聞きいただいた松阪市法田町の自治会長で、葉生田神社祢宜村林史郎さんのお世話で、百二十七年ぶりに「櫛田の渡し」を再現（櫛田川第一漁業組合の協力）していただき、また漕代地区連合自治会長西出紀生さんのお世話で、渡し場の草刈整備と地元の方に多く出迎えお見送りいただいた。また、稲木町の青木直人さん宅には施行所が設けられ、休息と心温まる茶菓子の接待を受けた。さらに街道沿いでは、八名の方から果物・菓子・酒・祝金等の施行を受け、旧街道沿いには参宮者に対する施行の心が強く残っていることを身をもって感じた。現在の参宮は、富士登山に例えると、ヘリコプターで登頂しているようなもので、「参宮の達成感」は四国八十八箇所巡礼と同様、遠路を歩いてこそ本当の参宮（心を癒され再生する）ができるのではないかと思った。

青く澄んだ櫛田川を４回にわけて渡る。

お蔭参り・伊勢まで歩講。青木さん宅での施行。

百三十名が熱心に聴講
●リレー講座●

今年は、伊勢まで歩講のコース沿いで、第一回（九月二日）津市芸濃総合文化センター、第二回（九月十日）津市結城神社、第三回（九月二十三日）亀山市関町木崎いっぷく亭、第四回（九月二十四日）松阪市神戸神社、第五回（九月三十日）亀山市旧館家住宅と、五回開催した。第一講は、岡田が「お蔭参り一人々は何ゆえ伊勢を目指したか」、第二講は井後政晏教授が「伊勢の神宮と式年遷宮」を話し、その間にDVD「伊勢の遷宮」、観光政策課岡康弘課長の「木遣り唄」の披露があった。聴講者はのべ百三十名で、旧街道沿いの旧家を利用して行われた亀山市や神戸神社（畳の間）では、伊勢の御師（家来の先達や手代）が檀家廻をして、伊勢信仰を広めた時のことが偲ばれた。

この二つの事業を通して感じたことは、かつて御師達が北海道の南端から九州の鹿児島まで、伊勢信仰を伝え、檀家の参宮では、檀家を「神の客」として迎えたことが、「一生に一度でも」と憧れられる地となり、街道沿いの多くの人々の無償の助け（施行）・お蔭を受けてはじめて、参宮者は無事故郷へ帰れたのではないか、ということである。